

# 使命を築き、今、を築き、広める

## 継ぐ

## びんごの年

▶1◀

戦後六十年。神武景気や、高度成長、オイルショックや環境問題……。戦後地方でも、戦災の焼け跡から立ち上がり、新しい産業を興し、伝統文化を守り伝えようとしたれども懸命に生きてきた。とりわけ二代、三代にわたり、ひとつのことを受け継いできた家や店では、「継承」と「発展」のはさまで試行錯誤を繰り返しながら、今、を築いてきた。還暦を迎えた戦後の歩みを振り返り、備後の明日を展望する。

福山市中心部の光南町にあ 十九戸が焼け、一九四五年八月八日の福山空襲。一四年大馬場。片膝をついた姿勢から、正三年)に建てられた同市新馬場(現・霞町)の能舞台立ち上がり、すり足で板の上も全焼したが、東京の喜多流をゆっくりと歩くと「ダン」。宗家で修業して帰郷した三代時折、床を踏みならす音が底目(久見さん(昨年二月、八冷えのする稽古場に響き、ヒ十九歳で死去)写真が四ノキの板がぐつとしなる。床七年、「祖父、父が伝えた能はあめ色に鈍く光り、何千、何万回と白足袋が行き来してある中央の板だけが白く浮かび上がる。



## 親から子に伝統の重み



稽古場で仕舞を舞う大島政允さん(中央)親子。使いこまれた床板は、備後の戦後を見つけてきた

## 能の大島流喜多能

を次世代に引き継ぐのが使命と現在の場所に再建した。能舞台は、老松を描いた鏡板を備えた三間(約五・四尺)四方。喜多流宗家の十五世実や十六世の長世、狂言の茂山千五郎家一門……。能が一部の人のものだった当時から年四、五回、一流の能楽師や狂言師を東京や京都から招き、日本の伝統を県内外に伝えてきた。

収入より出演料や交通費、宿泊費の方が多く、赤字もしばしばだったが、私たちの勉強にもなること続け、質の高い能がこの場所から次々と発信された。

県文化団体連合会の平井隆夫会長84は、戦後の焼け跡から、いち早く能を復興させた大島家の功績は大きい。物質がない時代に、能を上演することで傷ついた人々の心を救ったと評価する。

その能舞台も老朽化が進み、大島家は七一年、個人所蔵の客員教授も務めた四代目有として生まれぬ観客席三百八十席を備えた三階建ての能楽堂を建て、二、三階に能舞

台を設けた。しかし、慣れ親しんだ舞台は壊さず、そのまから、いち早く能を復興させ、一階に移築した。

「福山に終戦直後から能文化をはぐくんでくれた我々の分身。だから父も私も残したんです。国総合指定重要無形文化財で、台湾の国立芸術学

院の客員教授も務めた四代目政允さん(62)が説明する。年四回の定例鑑賞会のほ

か、県内外で多くの公演をこ

なす大島家にとっては今も大切な空間。政允さんの長男で、東京で修業中の五代目・輝久さん28、長女で喜多流初の女性シテ方・衣恵さん(30)、二女の文恵さん27、三女の紀恵さん(24)からも公演前、納得するまで稽古を繰り返して本番に臨む。

衣恵さんら三姉妹は九九年から、福山市の小学校などで能の指導を始めた。福山市立南小の六年生は総合的学習の時間で所作や謡を学んでおり、松本悦美教頭は「集中力や落ち着きも出てきた」と子どもたちの変わり方に驚く。

備後の戦後を見つめ続けた稽古場。能文化の発信に加え、すそ野を広げるといふ新しい使命も生まれた。今年も大島家の能楽師や多くの弟子たちがこころで舞の練習に励み、謡を響かせようとしている。

喜多流大島家 喜多流は江戸時代初期、幕府からそれまでの4流(観世、金春、金剛、宝生)に加え、流派創設を許された。大島家は、福山藩士だった初代七太郎(1839-1911)が14世喜多流宗家に師事して能楽師となり、宗家直系の役職である「職分」の地位を与えられた。最初の能舞台は七太郎の長男で2代目の寿太郎(1871-1929)が建て、戦前の能の普及に大きく貢献した。



第二次大戦で焼失した大島家の能舞台(1927年5月、大島家提供)